

## ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念（一）

——ユダヤ人で哲学者であること——

品川哲彦

### 一 ハンス・ヨナスの生涯

一・一 哲学者でユダヤ人であることの緊張

ハンス・ヨナスの生涯を顧みると、目をひくのは足掛け八年にわたる従軍体験である。時代のめぐり合わせから、出征した哲学者は数多い。

ヘアはイギリス軍兵士としてビルマで日本軍と戦った。彼は、後年、「奴隷制のどこがまちがっているのか」と問いかげ、「私はおそらく大方のひとよりも気持ちよこめてそういえる。いいようによつては、私はかつて奴隷だったからだ」(Hate: 165) と記している。これは日本軍の捕虜の処遇をさしている。他方その日本では、一九二二年に生まれた山田晶がこう記している。「戦後の学生諸君は、戦争に行くとは『殺しに行く』ことだと考えているようである。しかし、当時のわれわれにとつて、戦争に行くとは『殺されに行く』ことを意味した」(山田: 8)、と。

ヨナスの場合、しかし、第二次世界大戦が勃発するや、イギリス軍にみずから志願したのだった。しかも、彼はイギリス人ではなかった。ドイツからパレスチナに入植したユダヤ移民だった。英軍に入隊したのは、当時、パレスチナがイギリス委任統治領だったからである。彼は仲間とともにパンフレットを発行し、若いユダヤ人男性たちに対独

参戦を呼びかけてもいる。「われわれとこの戦争との関わり。若いユダヤ人男性諸君へ一言」と題する文書がそれである。さらにまた、英軍や国際的なユダヤ人組織であるユダヤ機関に働きかけてユダヤ人部隊の編成も画策した。英軍とユダヤ機関は政治的理由から提案にのらなかつた。イギリスはユダヤ人の入植に反対する声を強めつつあるアラブを刺激したくなかつた。ユダヤ機関はパレスチナ在住のユダヤ人の自己防衛を優先しなかつた。のちに英軍がユダヤ旅団を編成したのは、フランスの敗北で戦況が悪化したためである。ヨナスは素志がかない、その一員に転属した。彼とこの戦争との関わりについて、ヨナスが大学生のころから、パレスチナでのユダヤ人国家の建設をめざすシオニズム運動に参加していたことは、もちろん、説明の重要な要素である。けれども、シオニストがすべて対独戦に参加したわけではない。パレスチナに移住したユダヤ人の学者たちのなかで従軍に志願したのは彼ひとりだつた。ヨナスにしても、入隊時にすでに三七歳の、いわば老兵である。同時代のドイツのユダヤ人の多くがシオニズムに傾いたわけでもない。のちにみるように、彼の成育環境ではそれは異例のことだつた。さらに、彼は生涯イスラエルと運命をともにしたというわけでもない。五一年秋、ヘブライ大学からの教授就任の招請を彼は断る。その主たる理由は、戦争と困窮のない環境での育児、四六歳にしてカナダでようやく大学専任職を得て始まりかけた安定した研究生生活の継続にあつた。だが、これはエルサレムの人びとからは「シオニズムにたいする裏切り」(P. 266)とみなされた。こうして始まつたカナダ、ついでアメリカでの哲学者としての履歴に、ひとは遅くに始まつた活動が晩年にいたつて豊かな実りをあげたのを見るにちがいない。五五年にニユースタール・フォー・ソーシャルリサーチ教授に着任。同校はドイツその他の欧州諸国から亡命してきた頭脳を集めたことで知られる。六九年、創設されたばかりの、アメリカの生命倫理学の研究拠点ヘイスティングス・センターの研究員に就任。生態学的危機における現代世代の未来世代にたいする責任を説いた著作『責任という原理』(七九年)にたいする世界的な反響。受賞者に錚々たる顔ぶれの

並ぶレオポルド・ルーカス博士賞やドイツ書籍流通平和賞の受賞。複数の大学からの名誉教授の授与。九三年に死去。だが、その五年後には、彼の仕事を学際的に研究するためにベルリン自由大学にハンス・ヨナス・ツェントルムが設立されている。とはいえ、哲学研究の影にユダヤ人としての意識が隠れてしまったわけではない。なるほど『責任という原理』では、神学的前提に依拠しない未来倫理が試みられている。けれども、ルーカス博士賞受賞講演「アウシユヴィッツ以後の神概念 ユダヤ人の声」では、アウシユヴィッツというできごとの生起と進捗に黙して介入しなかつた神はいかなる神として考えられるかという問いにユダヤの伝統を顧みつつ応答し、それをつうじて、人間の責任をあらためて神学的かつ存在論的に基礎づけようと試みる。

振幅の大きい人生——ヨナスの生涯をそう形容してまちがいなからう。

ヨナスは八〇歳代半ばにうけたインタヴューでこう語っている。「哲学者であり、かつユダヤ人であるということには、緊張があります」(Koelbl: 123)。哲学者は思惟にのみ忠実であるべきだから、自分が継承した遺産からも自由でなくてはならない。それゆえ、無神論的でなくてはならない。だが、ユダヤ人であることはユダヤの神への信仰と切り離せない。実人生においても、哲学研究においても、二つの契機のいずれかがあるときには力を得、あるときには後景に退き、屈折の多い彼の人生を独自の結晶へと形作っている。

以下、本稿では、一・二でユダヤ人としての側面に焦点をあて、一・三で責任原理を提唱するまでの哲学者としての側面に焦点をあてる。後編、二では、死の前年に刊行された『哲学的研究と形而上学的推測』に収められた神に関する論文について解題する。

## 一・二 ユダヤ人として

ユダヤ人が市民として平等な地位を認められるのは、一八世紀、啓蒙時代のことである。その嚆矢はフランス革命の人権宣言だった。この思想はナポレオンによる占領をとおしてドイツに流入し、一八一二年、プロシアでもユダヤ人に平等な市民としての地位を認める勅令が發布される。以後、「解放」政策はドイツの他の領邦に普及していった。他方、一八世紀のドイツでは、ユダヤのなかにも近代化の動きが始まっていた。啓蒙哲学者メンデルスゾーンは寛容を説き、ユダヤ教とキリスト教の綜合を図った。ユダヤ教の儀式や生活慣習も改革された。ユダヤ教だけでなくキリスト教も教えるユダヤ自由学校も設立された。

近代化にたいしてはユダヤ正統派のなかに強い反発が生まれ、反セム主義は何度も社会生活のなかで頭をもたげた。けれども、一九世紀のドイツには前世紀の啓蒙の精神が徐々に浸透し、医師ヨハン・ヤコービのいうように「ユダヤ人であり、同時にドイツ人である」(JMB: 93)、こと——あるいは、ヨナスが彼の父のアイデンティティにふれて語ったように「ユダヤの信仰をもつドイツ国民」(BV: 33)であること——が可能になりつつあった。

ヨナス家は一八一五年にエッセン近郊の町ボルケンに織物会社を設立した。早くに家業を継いだヨナスの父グスタフの奮闘もあって、九六年にライントのマンチエスタ、という異名をとるメンヒエングラードバッハに進出し、リネンとダマスク織の工場を経営していた。一九〇三年、ヨナスはこの豊かなユダヤ人家庭に次男として生まれた。

母ローザはラビの娘だった。こういえば、父方が近代を、母方が伝統を代表するようにみえるが、相反する要素を抱えたヨナスの人生はここでも交錯がみられる。母は実父の厳格なユダヤ式の食生活を窮屈に感じ、父は重要な祭日には出張先でも戒律を守り、周囲に吝嗇と見誤られて嘲笑を買った。ヨナスは自分に影響力のあった親類をふたりあげているが、そのうち、母方の叔父、ラビの息子が啓蒙主義者だったのにたいして、父方の大叔父は実業のひとだっ

たが、シナゴグでの儀式に厳格に連なり、気が散りかけると、手の爪を押しつけてその白く変色した部分をみて死を念頭に浮かべるといふ信仰心の厚いひとだった。母方の祖父はラビでも自由主義的だったが、父方は正統派ユダヤ教徒の氣風だったのである。近代社会への同化とユダヤの伝統の墨守が共存していた。ヨナスはキリスト教徒の友人の家に招かれたが、ヨナス家はユダヤ人ではない客を親しく招くことはなかった。だが、ユダヤ人が非ユダヤ人を表わす語「Goy」は、家庭のなかで一度も耳にしたことがなかった(田…35)。ヨナスは一般の学校に通ったが、ユダヤ人は学級に彼ひとりだった。級友とは不和でなかったが、ヨナスは自分の「非帰属感」(田…36)をも感じていた。ユダヤ人学生の多くが医学や法学のような職業に直結する学問を選ぶなかで、家業のために大学進学をあきらめたことを生涯残念に思い、読書家だった父の理解のもとに、ヨナスは哲学を、しかも望みの年月だけ学ぶことがゆるされた<sup>(1)</sup>。二年、ヨナスはフツサールの令名にひかれてフライブルク大学に入学し、魅力あふれる若い講師ハイデガーを知ることとなる。

第一次世界大戦は、あとからみれば、ユダヤ人にとってドイツ社会の大きな曲がり角であった。ヨナスは彼の六、七歳年長のいとこが病身にもかかわらず、志願して前線に出たと書き残している(田…30)。中流階級のユダヤ人の志願率は高かった。順応した(ないしは、できた)ユダヤ人にとって、ドイツは愛する祖国であり、その愛国心は自分たちの他者性を自覚しているがゆえにいっそう熾烈になった。もっと踏み込んだ解釈をすれば、参戦は「国家権力により授与された解放の特権を贖うための歴史的機会」(トラヴェルソ…30)なのであった。だが、ドイツのユダヤ人が愛国心をもてたのはこの時期までだった。

まことにひとりの人間が生きる条件は数年の差によって大きく変わってくる。むろん、ヨナスといふことがその出生年をとりかえたからといって、ヨナスが第一次世界大戦中に志願したとはいきれない。はっきりしているのは、

ドイツの敗北、ドイツ帝国の崩壊、厳しい賠償を求められたヴェルサイユ体制のもとで、敗戦の理由に「国内にいた背後からの一刺し」としてユダヤ人の存在が——ユダヤ人の歴史にしばしばあったように、またしてもスケープゴートとして——指呼されるようになった時期に十代後半から二〇代前半を迎えたユダヤ人の世代に、ドイツにたいする祖国愛が育つはずはなかったというのである。ヨナスはフライブルク大学入学の年にシオニスト学生組合であるIVRIAに加入し、翌年ユダヤ学を学ぶためにベルリン大学に赴くと、シオニスト学生組合マカベアと同じく学生組合のユダヤ組合連合に参加し、シオニスト学生集団の大同団結の動きに尽力する。このなかでレオ・シュトラウスらと相知り、のちに親交を結ぶゲルシヨム・シヨールムの存在を知る。

シオニズムは、一八九四年にフランスで起きたユダヤ人軍人の冤罪事件、ドレフユス事件をきっかけに、ブタベスト出身のヘルツルが提唱し、パレスチナにユダヤ人国家を建設することを目的とした。九七年に第一回大会が開かれ、四年後にユダヤ民族基金が設立され、それによって〇七年からユダヤ人が入植するためにパレスチナの土地が購入され始めた。ヘルツルはパレスチナを版図としていたオスマン帝国と交渉して実らぬままに死去したが、第一次世界大戦はこの点でも大きな転機となった。一七年、イギリスの外相バルフォアはシオニスト連盟会長でユダヤ系銀行家のロスチャイルド卿に、パレスチナにおけるユダヤ人国家の建設を支持する旨、書簡を送った。これはアラブむけの協定とも、フランスやロシアむけの協定とも矛盾する二枚舌、三枚舌の外交政策だったが、そこへ第一次世界大戦でドイツに与したオスマン帝国が敗北すると、二二年、パレスチナはイギリス委任統治領となり、バルフォア宣言は確かに現実味を帯びてきた。同じ年、ドイツ国内では、ヴェルサイユ体制の厳しい賠償を履行する政策を推進していたユダヤ出身のラーテナウ外相が極右に暗殺された。大学二年生だったヨナスは暗殺の背景にある反セム主義に鋭く反応した。シオニストの学生たちは、もちろん、戦後のインフレに苦しんだにちがいないが、しかし「ヴェルサイユ条約

は自分たちではなく、ドイツ民族の問題だと感じ」ていて、この条約がパレスチナに「ユダヤ民族の安住の地を建設する権利を国際的に支えている」という「そのかぎりでは私たちはこの条約を支持していた」(四二〇—二〇九)。彼らにとって、祖国はもはやパレスチナだったのである。

だが、シオニズムへの傾倒は父の逆鱗にふれた。豊かな工業都市メンヒエングラードバッハに同化したユダヤ住民約一二〇〇人のなかで、彼は唯一のシオニストだった。シオニズムはユダヤ人の当然の選択ではなく、妄想に近く、父によれば、息子は「低い階層に身を落とした」(四二二—二二三)のだった。これは世界史的な対立といってもよい。反動と差別に抗いながら着々と市民としての地歩を占めてきたユダヤ人の後ろ盾は近代の啓蒙であり、シオニズムは啓蒙によつては解消できない——反セム主義の民族主義に対抗するユダヤの——民族主義だった。それはまたユダヤ人の帰属意識の分裂でもあった。啓蒙に与するユダヤ人はシオニストを「ドイツ国民であることへの裏切り」(四二四)と非難し、シオニストはピンスカーのいう「どこにもいるが、どこも故国ではない」(JMB: 128)ユダヤ人の疎外感を代表していた。ヨナスの父のような順応し成功した世代には、築き上げ、失うものがあつたが、子の世代と高い収入や地位を得ていない者とは、現在の抑鬱と暗い未来の予想しかなかった。あとからみれば、親の世代の期待は破砕された。三五年のニルンベルク法にみるように、彼らが自分たちは国民の一員だと意識していたその国は法のもとに彼らの市民権を否定し、財産を剥奪(アーリア化)したからである。ヨナスは母からの聞き伝えとして、「あなたの息子さんは正しかった。真の預言者です」というユダヤ婦人のことばを書きとめている(四二七—二七三)。

けれども、若いシオニストとしてヨナスが描いていた夢は、現実のヨナスにはそぐわぬものだった。パレスチナに入植し、農業に従事し、国の礎を作る——その準備のためにシオニストの若者は農業実習を体験した。ヨナスは所屬する学生組織のなかでただひとり志願して、半年間熱心に学ぶが、農場主の目からみても、当の本人からみても、肉

体労働より頭脳労働のほうがむいていた(四二二〇)。彼はまた、ロシアや東欧から逃れてきた貧しいユダヤ人たちに接して、パレスチナの新たなユダヤ人共同体を担うのはこうした大衆であつて、自分たちではないと感じる(四二二〇)。こうして彼は哲学に帰る。ハイデガーが教授に就任していたマールブルク大学に赴き、ハイデガーと新約聖書の歴史的解釈で知られるブルトマンとの指導のもとに、二八年、ゲノーシス研究で学位を得る。

ヨナスが実際にパレスチナにむかつて歩みだすのは三三年のことである。この年、ヒトラーが首相に就任し、ハイデガーはフライブルク大学総長に就任してナチスに協力した。四月一日、ナチス突撃隊はユダヤ人の商店、医師、弁護士にたいするポイコットを煽動した。ヨナスはこれを見てドイツ出国を決意する。「私はひそかに誓つた。もう二度と帰ることはないだろう、占領軍兵士としてでなければ、と」(四二二三)。公然たるポイコットによつて、生計の道は断たれつつあつた。ヨナスは両親にも出国を勧めるが、すでに病身の父は肯んじなかつた。父は三八年に病死する。残された母はパレスチナ移住の準備を整えていたが、おりから一月九日、ナチス突撃隊がユダヤ人商店や家屋、シナゴークを破壊した水晶の夜に、ヨナスの弟が捕縛され、強制収容所に送られた。当時、旅券があれば、強制収容所からの解放は可能だつた。母は末息子に旅券を譲つた。ヨナスは八方手を尽くしたものの、ふたたび旅券が手に入らぬうちに、翌年九月、英仏はドイツに宣戦し、母が出国する策は尽きた。四四年年末に戦地から妻にあてた手紙に、ヨナスは明年への期待として「母が生きていて、その息子たちとまた会えるように」(四二三三)と記している。だが、その母はすでに四二年に強制収容所で殺されていた。

先に記したように、英仏がドイツに宣戦するや、ヨナスは、ユダヤ人部隊の編成を画策し、周囲の友人のなかでただひとり従軍を志願した。学生時代のシオニストの熱情がふたたびヨナスのなかで燃えあがつたようにみえる。しかし、ヨナスの視点からすれば、対ナチス・ドイツ戦争は自己防衛にほかならなかつた。「われわれとこの戦争との関



わり」からひこう。「世界の原理への拡大に努めているナチの原理は、われわれの人間の尊厳と同時にわれわれが地上にただ現存するだけの可能性すら狙いの中心に定めている。われわれはナチの原理の形而上学的な敵なのだ」(同…188)。ヒトラーの首相就任以来、ユダヤ人の公職追放、市民権の剥奪、財産の没収、水晶の夜。法のもとに着々とドイツ在住のユダヤ人の人間の尊厳は奪われてきた。とはいえ、ヨナスが「現存の可能性」に言及し、はつきりと「ナチの反セム主義が意味するものは絶滅しかありえない」(同…189)と記しているのは注目に値する。三九年一月時点でヒトラーはすでに「ヨーロッパにおけるユダヤ民族の絶滅」を構想していたが、三九年は外面的には、ユダヤ人への住居の賃貸契約を猶予なしに解約できる法律を制定してゲットト化を進める段階だったからである。収容所に最初のガス室が設置されたのは四一年だった。ヨナス自身にしても、ナチスによるユダヤ人迫害の予想以上の惨状に実際に接したのは、四五年、ユダヤ旅団での進軍の途上、アウグスブルク近郊で強制収容所から解放されたポーランド出身のユダヤ人たちに出会ったときであった。市民権が奪われた以上、生命の保証も脅かされるおそれまで推論を進めるとしても、多くのひとは思いおよばぬか、思いついてもあえてみずから否定しがちであろう。起こりうる恐怖の事態にたいするヨナスの洞察力——それは、後年、彼が地球規模での生態系破壊の致命的な進行を事前に食い止めるために提唱した「恐怖の発見法」(P.V. 183)の発想につながるものであろう——を例証している。ユダヤ人のいな世界の実現がナチスの形而上学である以上、他の人種以上に、ユダヤ人こそ対ナチス・ドイツ戦争に立ち上がる責務がある。それが彼の「若いユダヤ人男性諸君への一言」だった。

実際には、ユダヤ旅団が交戦する機会はあまりなかったようである。旅団はイタリアで一度激しい戦闘を経験し、オーストリアに進み、ドイツを通過し、爆撃によって廃墟と化した町をみる。「私はその感情を二度と体験したくはないが、隠すつもりもない——歓呼の声のとびでる、満ち足りた、少なくとも半ばは満ち足りた復讐の感情だった」

(E: 216)。ヨナスはドイツ出国時の誓いどおりに占領軍の兵士としてドイツに帰ってきた。しかし、生地でも知りえたのは、母がアウシユヴィッツに移送されたという知らせだった。

冒頭記したように、ヨナスの従軍体験は足掛け八年にわたる。ところが、あとの二年、イスラエル独立によって始まるパレスチナ戦争の体験に、ヨナスはあまりふれていない。英軍で砲術の訓練をうけ、戦争体験もあるヨナスは熟練兵であり、砲兵隊士官として召集されるが、それを語る口調は英軍に志願したときと対照的に受動的である。「私は独立戦争に改めて引き入れられた。このたびはイスラエル軍である」(E: 245)。だが、イスラエルはまさに彼の国だったのではないか。ダビデの星を隊旗とするユダヤ人部隊の編成を提案して「外人部隊というやり方ならあるが」(E: 202)と婉曲に断られたときとちがいで、イスラエル軍はユダヤ人の国軍であったはずだ。ところが、イスラエル独立について語るとき、その叙述には、四〇歳を過ぎてからようやく始まった家庭生活、数年の空白を経て取り戻した研究生活がふたたび妨げられた慨嘆の色が濃い。「パレスチナ分割に結論が出、イギリスが委任統治を引き上げる準備をしますと、すべてが急に終わりました」(E: 244)。本人の述懐では「エルサレムの防衛に小さな役割を果たして」(ibid.)、翌年、軍務から解放されたとき、ヨナスはイスラエルを安住の地とは思わなくなりはじめた。その思いはテレビ番組のインタヴューのなかで比較的にまとまったかたちで吐露されている。「私たちの生きているあいだ、ここにはもはや平和はないだろう。というのも、アラブ世界が敗北を甘受し、私たちの存在と和解するようになるのは、この世代のうちには期待できないからだ。ここではなんらかのかたちで戦争状態がずっと続くか、そうでなくともいずれにしても臨戦態勢がずっと続くのを覚悟しなくてはならない」(E: 250)。さらにそこへ長女が生まれた。講師として勤めていたヘブライ大学に専任教員の空きはなかった。四九年、レディ・デービス基金によってモントルオール・マツギル大学に招かれたことは、単俗な表現をすれば、渡りに船の申し出だったかもしれない。ヨナスは、

当時、「Montreal」の読み方さえ知らなかったという (ibid.)。期間は一年間。それきりイスラエルから離れようと思心していたわけではなかった。ヘブライ大学の旧友シヨールムには依然として教授人事の動向を照会していた。他方、大西洋の両岸の七、八〇の大学にも打診した。五〇年五月、オタワのカールトン大学が応じてくれた。初めての専任職だった。長男が誕生した。

五一年九月、ヨナスはヘブライ大学学長から教授招聘の文書をうけとった。逡巡のあげく、彼はこれを断った。尽力したシヨールムには驚天動地の回答だった。ヨナスは前述したように「シオニズムへの裏切り」という非難をうけた。しかし、その基調はイスラエルの独立とそれに続く戦争の時点ですでに始まっていたようにみえる。子育て——学長宛書簡では「正常な条件で暮らしている家族を異常な状況に移すことは正当化できません」(E: 463)——と安定した研究生活という前述の理由は、イスラエルの永続的な戦争状態への忌避を基盤としているからである。さらに、謝絶の手紙には書けない理由もあった。「イスラエルから去ることは、私が将来何をしようとも完全な自由を得る機会だった」(E: 265)。

ひとはシオニストを選ぶのも、哲学者を選ぶのも自由である。学問を志した者が良好な研究環境を望むのは当然である。カナダからさらに移ったアメリカについて、ヨナスはこう語っている。「現代社会の巨大な折衷、さまざまな思想教説、立場、方法の合流がアメリカではたえず起きています。あらゆるものがそこではその場を得るのです」(E: 265)。見方を変えれば、若い時期にシオニズムに傾倒した彼は、中年の哲学者として、思想信条の自由を何より重視する啓蒙の精神に寄り添ったといえるのかもしれない。けれども、それではヨナスにとってシオニズムとは何だったのだろうか。

シオニズムの素志はパレスチナにユダヤ人国家を建設することだった。イスラエル建国で、それは実現した。建国

後、パレスチナ全体に領土を拡大しようとするベギンらの修正シオニズムが生まれ、現在ではシオニズムといえはこちらの連想のほうが強い。ヨナスの場合、そのシオニズムはあくまで前者であつて、後者ではなかつた。だが、だからといって、彼が他のシオニスト以上にユダヤ人の入植によつて脅かされるアラブ人の權益に配慮していたとはいえない。「アラブ人がバルフォア宣言にたいして、したがつて始まりかけたユダヤ人入植と土地の購入にたいして力でもつて反応するまで、私たちはアラブ人の存在をおおよそ看過していた。(中略)自分の恥をいわなくてはならないが、私もアラブ人のことを十分に考えてはいなかつた」(同前)。学生時代の回顧だが、筆はすぐに若いころのユダヤ人救済の夢想に転じる。彼がその後アラブについてどう考えたかにはふれられていない。パレスチナ入植後、彼はアラブ人による襲撃に対抗する自衛組織ハガナに入隊し、エルサレム郊外に散在する民家を守つた。実際に戦闘を経験したかはさだかではない。第二次大戦後、ヨナスはアラブ人の村長からエルサレム郊外に家を借りた。そこでの生活は、イスラエル独立と戦争によつて打ち破られるまで、牧歌的な懐かしさをもつて回顧されている。ヨナスによれば、アラブ人の村民とヨナス夫妻の關係は友好的だつた。

おそらくは、ヨナスにとつてシオニズムとは、何よりもまずドイツの反セム主義からユダヤ人が身を守ることできる場の建設だつた。ナチス・ドイツはユダヤ人と共存できない「形而上学的な敵」だつた。これにたいして、アラブとイスラエルの關係はそのように認識されることはなかつた。それはあくまで政治的な対立だつた。だが、若きヨナスのシオニズムは政治的主張でありながら、その対立をまさに政治の問題として咀嚼するような政治感覚を備えていなかつたようにみえる。パレスチナが耐えうる入植者の人口、土地購入という合法的手段が巨大な資力を背景にすれば法外な手段になりうる可能性、パレスチナにユダヤ人の安住の地を建設するというヴェルサイユ体制下での「権利」がユダヤ系の資力を根底にした力關係の産物であること、逆に、イギリスがアラブ側と密約したフサイン・マク

マホン協定は同等の力をもちえなかつたこと——それらの問題は主題化されていない。狂信的な政治的主張なら、冷静な政治的省察は望めない。ヨナスは狂信的なシオニストではない。けれども、彼の語彙と発想は、政治的な分析よりも、哲学的、形而上学的、さらには宗教的、倫理的な定式化のほうに傾いていた。

この点に関連して付言しておく。ヨナスは「われわれとこの戦争との関わり」のなかで「この戦争は、比喩的にいえば、現代の最初の宗教戦争である」(E:194)と記している。ヨナスが対置したのは、ヘブライからキリスト教をへて合理的で人間的な近代ヨーロッパ文明に継承されてきた「人間性」(G.P.)の立場と、これを否定する「最も深い意味で異端」「人間蔑視の力のカルト」としてのナチスだった。前者の共通の地盤は「人間の倫理化」(E:195)とされる。参戦を呼びかける政治文書だから、表現は当然煽動的である。だが、彼がナチスを人間蔑視と断じるのは、ある人種全体をその人種であるがゆえに殲滅することを意図しているからであろう。歴史的事実として、その人種はユダヤ人だが、ユダヤ人の敵であるというたんなる民族主義的な理由でナチスを断罪しているわけではない。この点にふれたのは、イスラエル建国後、ユダヤ人と敵対する点でアラブをナチズムと同視する政治的煽動が用いられ、さらに一般的には二一世紀に入ってますます、宗教戦争という比喩が政治的経済的歴史的对立を糊塗するために使われるようになっていくからだ。しかし、そのためにヨナスの上の表現を援用したり、非難したりするとすれば、いづれもあたらない。

とまれ、イスラエルを去つて「何を求めるにも完全な自由」を求めたことは、哲学者ヨナスにとつては適切な選択であつたろう。というのも、哲学者であり、同時にユダヤ人であることに緊張があるにしても、その緊張は自由のなかでいつそう生産的でありうるからだ。後年、ヨナスはテレビ番組で「あなたのハイマートはどこですか」と問われた。ハイマートは故郷を意味するが、生地にかぎらず、安住の地の意に近い。彼は確答を避け、こう語つた。「一度決意

して、私にとつてのハイマートのようなものをもとうとしました(Ev. 22)。それはパレスチナをさしているが、「もとうとしました」とは微妙な言い回しである。しかし、哲学が、継承した遺産からの自由を要請する以上、彼が哲学者であるかぎり、少年時代と中身はちがえ、「非帰属感」を抱きつづけるさだめにあつたのである。

### 一・三 哲学者として

ヨナスの研究者としての経歴はグノーシス研究から始まる。

グノーシスの定義については、専門家のあいだでもなお論争のあるところで、専門知識に乏しい私のよく下すところではないが、およそこうまとめることはゆるされるだろう。すなわち、私たちが生きているこの世界は私たちと徹底的に敵対している。なぜなら、私たち——厳密にいえば私たちの魂ないし靈——はこの世界を作つた創造主よりもつと氣高い神に由来しているからだ。世界を超越する神的なものに由来するといわれる魂ないし靈には、ギリシア語では *pneuma* があてられて、この世界の創造主に由来し、したがつて身体と結合している心 *psyche* と区別される。世界を超越する神の側からその神についての知 (*gnosis*) を授けられることで、私たちはこの世界とこの世界の創造主の支配から逃れうる。すなわち救済される、と。この要約は、グノーシス主義の起源に関する国際学会で採用された定義、「①反宇宙的三元論、②人間の内部に『神的火花』『本来的自己』が存在するという確信、③人間に自己の本質を認識させる救済啓示者の存在」(簡井・1987) にそつている。とはいえ、この定義を採用しても、どの時期のどの思想をグノーシスに含め、どれを外すかという問題がグノーシス研究としてはなお残る。

ヨナスがグノーシスに関心を抱いたのは、新約聖書をあつかうブルトマンのゼミにおいて『ヨハネ福音書』のなかの神の知 (*gnosis theou*) の概念について報告する役目を引き受けたときだった。ヨナスはこの課題からこの概念が

生まれてきた宗教史的背景に視野を広げ、グノーシス研究に着手した(四二二)。それが博士論文につながり、ひいてはドイツ出国翌年に刊行された『グノーシスと古代末期の精神』第一部に、さらに長い軍役による空白を経て五四年に出版された第二部に結実していく。同書はドイツ語で書かれたまさに専門書だが、ヨナスは五八年に英語で一般向けの『グノーシスの宗教』を著している。

ヨナスの指導教員としてハイデガーもブルトマンもどちらも不可欠な存在だった。主指導教員はハイデガーだったが、研究内容についてはブルトマンが助言した。ブルトマン自身、ハイデガーの実存分析を自分の研究にとりいれたように、両者の関係はハイデガーのナチス協力をきっかけに冷え込むまでは円満で、ヨナスはしつくり息の合ったふたりの師をもつことができた。ブルトマンは文体様式の分類をとおして新約聖書の成立史の研究を進めていた。科学的な方法で宗教を研究した学者として、ヨナスはブルトマンに終生変わらぬ敬意を寄せている。ヨナスは時代状況への関心をこの師から受け継ぐ。そこで彼は、従来、キリスト教の異端として位置づけられる傾向にあったグノーシスをこの対比から解放し、キリスト教もまたそこから生まれ出た時代に通底する精神として、したがって部分的にはキリスト教以前にまで遡って通底する精神として捉えようとした。その結果、『グノーシスと古代末期の精神』は、グノーシスについては、「従来、たとえ異端的キリスト教としてではあれ、キリスト教内部のものともみなされてきた現象を、今や、キリスト教の外部と内部いずれもが等しく共有する文化空間のなかで、際立って力を得ていた精神の方向性としてとりだす」ことができ、キリスト教の歴史的位置づけについては、「普遍的で折衷主義的なグノーシスという拡大された概念が(慣用の意味で『グノーシス』的な)異端から正統なキリスト教文書へ敷衍され、つまり遡っては(とりわけパウロとヨハネの観念世界と概念用語における)原キリスト教的なものへ、後世に向けては(とりわけアレクサンドリアの)ギリシア教父と初期修道院に敷衍されたために、たちまちのうちにキリスト教はその全体に

わたって折衷主義の宗教史の一部となった」(GSG: 1-2)。他方、ヨナスの研究方法はハイデガーの実存分析に拠っている。私たちは世界についての理解、世界と自己との関係についての理解を手がかりにして生きているが、こうした理解は私たちが生きている歴史的な状況を支配している時代の精神によって制約されており、しかもその制約のなから自分の可能性を選びとる。ヨナスは「存在と時間」に展開された現存在、実存、被投的企投などの思想をグノーシス思想の生まれた時代に生きた主体に適用して解釈する。解釈者自身も現存在であることがこれを可能にする。それは特定の時代を対象とするゆえに「存在的で実証的な研究にとどまるけれども、特殊な哲学的企図となる」(GSG: 14)。

とはいえ、この方法では、グノーシス的な世界理解ないし世界と自己との関係の理解をそれ以外の時代の歴史的状況にも見出す可能性もある。つまり、どの時代のどの思想をグノーシスと呼ぶかの境界は緩やかになる。実際、すぐあとにみるように、ヨナスはグノーシスと共通の世界観を近代の存在論、とくに実存哲学に見出していく。この点、歴史的な厳密さを求める論者の批判を招く面がある。たとえば、筒井賢治は「古代末期の地中海世界におけるグノーシス主義運動の位置づけを明確にし、同時代における正統多数派教会やキリスト教外の思想(中略)との関連を研究課題として定着させた」(筒井: 205)とヨナスが切り開いた歴史的展望の広がりを評価しつつも、彼自身はグノーシス概念のもととの用法に忠実に、紀元二世紀に簇出したキリスト教グノーシスに基準をおくゆえに、「グノーシスを人間の精神的な姿勢に還元するというまさにその哲学的なアプローチによって、ヨナスは『いつでもどこでもグノーシス』のような考え方にも道を開いてしまった」(同上)と批判している。

だが、本稿の目的はヨナスの哲学の展開を追うことにある。彼のグノーシス理解がその展開にどのように影響したかという点に論を進めよう。



五二年、ヨナスは論文「グノーシス主義と近代のニヒリズム」を著した。これは「グノーシスの宗教」の第二版のなかに「エピソード　グノーシス、実存主義、ニヒリズム」としてとりいれられた。そのなかでヨナスは、「解釈学的機能が逆転し、相互的になった——錠が鍵となり、鍵が錠となった」(G: 321)と記している。ハイデガーの実存分析を鍵としてグノーシス思想の内奥に踏み込んだわけだが、逆に、後者が鍵となって前者が解明できるようにみえてきた。ヨナスが両者に共通のものとして捉えたのは、「人間と人間が宿っているもの——世界——との絶対的な裂け目の感情」(ibid.: 327)である。この感情はハイデガーに限定されない。ヨナスは、世界の沈黙にたいするパスカルの戦慄を引用し、精神(思惟)と物質(延長)とのあいだにデカルトの設けた厳格な境界に言及し、ニーチェによる神の死の宣告を援用する。結局のところ、近代の存在論全体がグノーシスと共通点をもっている。自然のなかに価値と目的を認めない機械論的自然観によって基礎づけられた近代の存在論と、この世界を人間の魂とは異質な劣悪な創造主によって創造されたものとみなすグノーシス思想は、この世界からの人間の疎外という一面を共有することになるからである。この世界観は、しかしまた、倫理的な示唆を含蓄している。世界が人間と対立するかぎり、人間は世界のどこからも人間のあるべきあり方をみとることはできないからだ。いいかえれば、人間が自然の一部とみなされない以上、自然のなかに秩序づけられるべき自然本性をもたない。「実存思想の」自由に「自己投企する」超本質的な実存というこの考えのなかに、私は、*pneuma*の超psychic的否定性というグノーシスの考えに似たものを見る。自然本性をもたないものは規範をもたない」(G: 333-334)。

しかし、近代思想とグノーシス思想のあいだには違いがある。グノーシス思想には、世界の創造主ではなく、世界を超越している至高の神が想定され、それによって人間は救済される。マンダ教文献のなかのアダムは、至高神の使いの誘いにたいして、自分がこの大地を去ったあとに「この広い大地を世話する者」がいなくなることを心配して拒

み、神の使いに「おまえの住んでいるこの場所を惜しがるな。この場所は荒地なのだから」(G:∞)とたしなめられる。こうして人間が向かうべき先は、この世界の外部にはあれ、示されている。逆にまた、人間がどこからこの世界に來たのかも示されている。人間がこの世界に生まれてしまったのが至高神の側のなんらかの失敗に起因するの(いわゆるシリア・エジプト型のグノーシス神話)、それとも、至高神と対立して存在する悪しき闇の神が至高神との戦いのなかで至高神に由來する魂ないし靈にこの世界を構成する物質をませて人間を作り出したのか(いわゆるイラン型のグノーシス神話)、いずれにしてもグノーシスでは、人間の出自は説明される。ところが、ハイデガーは、人間がこの世界に投げ込まれている、——ヨナスによれば、この概念は「グノーシス的」(G:337)である——と語るが、どこから投げ込まれているかは明らかではない。このことは何を意味しているだろうか。救済がない。人間は自由を選択して行為する主体であるだけで、どこへむかって投企すべきか、何をすべきかが示されない。だがそれだけではない。ヨナスによれば、そもそも被投性という表現自体が意味を失う。なぜなら、「投入者なき投入」となるからだ(G:339)。

「グノーシスと古代末期の精神」から「グノーシス主義と近代のニヒリズム」まで、およそ二〇年が経過していた。「実存についてのハイデガーのいくつかの洞察がグノーシス思想家のなかにすでに形成されていただけでなく、ハイデガー自身が彼の思想のなかに現代のある種のグノーシスの現象を叙述していた——私がこの考えに気づいたのははるかのち、ハイデガーにたいする尊敬からすつかり解放されてからのことである」(H:116)。ハイデガー評価の転変した理由がハイデガーのナチス協力にあったことはいまでもない。

ヨナスにとって、ハイデガーがナチスに協力できたことは驚くべきことだった。ヨナスによれば、哲学的思索はそのような愚行から哲学者を護るはずである。そうでありながら、同時代の傑出した哲学者としてヨナスの認める人物

がそれに関わった。どうしてそのようなことがありえたか。その理由は、「存在と時間」が説く決断が、ただ死への先駆的覚悟性によつて肯定され、決断の中身を、それがたとえナチスへの協力であつても、裁可する規範をもたないからである。ヨナスはそう解釈する。

六四年、ハイデガーの思想を神学に摂取しようとするプロテスタント神学者たちが学会を企画し、ヨナスは講演に招かれた。ハイデガーの用いる、負い目、良心、呼び声、聴く、応答、隠れなさ、牧人等々の概念はキリスト教の伝統の概念と重なり合うものであり、一部の神学者を魅了していた。ところが聴衆の予想に反して、ヨナスはハイデガーの思想が異教的だと指摘した。すなわち、後期ハイデガーの鍵概念である歴史、存在が歴史のなかにみずからを顕わすとは、つねなる啓示を意味している。しかし存在の呼びかけのどれに耳従うべきかの規範がない。神学的にいうなら正統と異端の区別がつかない。さらにハイデガーのいう存在は無名的であつて、その呼びかけはキリスト教的な人格的な呼びかけではない、と。ヨナスはこうしめくくつた。「人間がその兄弟を守る者であることがみじめにもできなかつたときに、人間が存在の牧人として聖なる者とされるのは聞き入れがたい」(HJ: 229)。「兄弟の守り手」という表現は、当然、兄弟を殺したカインが神にむけた反問、「創世記」第四章九節の「私が兄弟の守り手だともいうのですか」を想起させる。カインはこの抗弁のなかに、逆説的に、人間のなすべき勤めをもらしている。「兄弟を守る者であることができなかつた」はホロコーストを示唆して、人間はせいぜい存在者の守り手にすぎない。だとすれば、前述のマンダ教文献のアダム、「大地を世話する者」に「この土地は荒地だ」と告げる、世界を超越するとき存在の語りはないのである。

それでは、人間はどのようにしてこの世界のなかに位置づけられているのだろうか。その探究が、戦後、ヨナスが新たに主題とした生命の哲学ないしは有機体の哲学だった。彼はこの主題を、哲学書を読むことのできない長い軍役

のあいだ、ただ自分の頭のなかで温めてきた。彼はその思索の跡を残すために、戦地から妻へあてた手紙のなかに書き込んだ。『回想』のなかに、四四年一月三〇日付以降の数片の手紙を読むことができる(頁：378-383)。ここに始まる一連の思索は『生命という現象』として六六年に刊行される<sup>4)</sup>。

その生命哲学はおよそこうである。生き物が無生の物質と決定的に異なるのは代謝活動によってである。有機体は自己を維持するために自己の存在に必要な物質(質料)を摂取し、不要な物質を排出することで同一のかたち(形相)を保持する。ここに外界の支配からの自由、自己、内面が発生する。有機体は自己同一性に必要な物質を外界に依存しているのだから、生は存在と非存在との極性を孕んだ冒険である。有機体が獲得した自由はつねに物質の欠如に脅かされる「必需と一体の自由」(PL:150)であり、有機体の自己と世界との関わりは「欠乏しているがゆえの超越」(PL:158)である。外界と直接に物質交換する植物から、知覚と運動によって食料を摂取する動物、捉えらるべき獲物を絵画や言語によって表象化し、それによって情報を交換しうる人間というふうには、外界からの超越の程度が増していく。こうしてヨナスは物質から人間の精神活動まで連続した過程を描き出し、人間をこの世界のなかに、世界の進化のなかに位置づけることを試みたわけである。

七九年、ヨナスは『責任という原理』を刊行する。この著作については別稿で集中的に論じた(品川…32-46、95-138)ので、ここでは責任原理の骨格のみ示す。xは存続を脅かされている。xが存続するか否かはyの行動如何にかかっている。このとき、yにはxを存続せしめる責任が生じてくる。現在世代の人間が地球規模での生態系破壊を進めれば、未来世代の人間の生活環境は悪化し、ついには生存できなくなるおそれがある。それゆえ、現在世代は未来世代の存続にたいする責任を負っている。だが、責任の対象は人間にはかぎらない。ヨナスの生命哲学は、人間と人間以外の生物種を連続的にあつかっているゆえに、人間だけが尊重されるべき対象ではないからだ。ヨナスによ

れば、目的をもつものが目的を成就することは善であり (Pv: 15)、生き物の活動は目的を帯びているのだから、絶滅の危機に瀕している生物種についても、人間がその絶滅の原因をなしているかぎり、人間はその存続にたいする責任を負うことになる (Pv: 185, 232)。しかしながら、人間は他の生物にはない特殊性をもっている。責任を感じるのは人間だけだからだ。したがって、この世界の進展をたんなる力の闘争と偶然とにゆだねずに倫理的に規整しようとするならば、つまり倫理が存在するためには、責任を存続させることが第一の責任となる (Pv: 186)。それゆえ、人類の存続が現在世代の果たすべき第一の責任である。

ヨナスの生命哲学と責任原理とは、連続しつつ、力点の置きどころが移る。物質交換によって自己を保つという意味での外界からの自由はすでに生き物の時点で成就されている。人間はそれに加えて、自分の行為のおよぼす結果を表象し、意図して行為する自由を獲得した。このことは生命哲学のうちに示された。ところが、人間が意図的で自由な行為主体として世界のなかで活動するとは、人間がいなければ世界が進んでいたであろう進行をながしか変えてしまうことにほかならない。世界の進行に影響する諸要因のなかで、人間は、人間なき世界に内在していた要因を超越する要因なのである。だからこそ、人間は責任を担っている。これにたいして、他の諸生物は結果的に世界の進行に影響しても、世界のそのような進行を思い描いて、それを意図して行為しているのではないから、責任をもたない。天敵を絶滅に追いやる生物種には、天敵を存続せしめる責任を問えない。しかも、人間は、「大地を世話する者」であると同時に、それに劣らず「大地を破壊する者」であり、「兄弟の守り手」であると同時に、それに劣らず「兄弟の殺害者」であり、今後もそうでありうる。それゆえなおのこと、人間はみずからその責任を問わなくてはならない。ところで、ヨナスは世界のなかの人間の位置づけについて、死の前年に刊行した『哲学的研究と形而上学的推測』のなかで、宇宙の進化と神の存在に絡めてふたたび論じている。後編では、その議論を解題し、その展開をみることに

にしよう。

\*本稿は関西大学在外研究員規程のもとに平成一九年度に行なった在外研究の成果の一部である。また、本研究は日本学術振興会の科学研究費による助成(平成二〇年度基盤研究(C)「ヨナス哲学の展開と統合——グノーシス、生命、未来世代、神——」, 課題番号20520032)を受けている。

註

- (1) ショーレムはその父親の「わが息子殿のやることといったら、まるで金にならん差ばかりでね」という愚痴を書き記している(シヨールム: 70)。
- (2) 第一次世界大戦において、ドイツのユダヤ人は十万人が動員され、一万二千人が戦死した(トラヴェルソ: 26)。十万人は当時のユダヤ人口の二割にあたり、その出征率はドイツ人一般より高かった(芝: 二)。
- (3) 新約聖書を聖書として認めないユダヤ人が新約聖書の授業に参加していたわけである。当時、ブルトマンの授業を受講していたユダヤ人がヨナスのほかにもうひとりいた。それがアーレントであり、ヨナスはアーレントと終生友情を結ぶこととなる(E: 111)。
- (4) 最初、英語で「生命という現象」、のちに独語で「有機体の自出」、さらに「生命という原理」と改題し、一部内容を変更して刊行された。なお、次の段落の叙述は他の論稿と重複するところがある(品川: 109-110)。

引用文献 ヨナスとベルリン・ユダヤ博物館冊子からの引川は「」内の略号を文中のカッコに入れて記し、コロンのあとにページ数を付す。その他は著者名とコロンのあとにページ数を付して文中にカッコに入れて記す。

Hare, Richard Mervyn. "What is wrong with slavery?" in *Applied Ethics*. Singer, Peter (ed.), Oxford University Press: Oxford, 1986

- Jonas, Hans, "Heidegger and Theology". *The Review of Metaphysics*, vol. XVIII, no. 2, 1964 [HT]
- *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologischen Zivilisation*. Suhrkamp: Frankfurt am Main, 1984 [PV]
- (加藤尚武監訳『責任とどう原理 科学技術文明のための倫理学の試み』、東信堂、2000年)
- *Gnosis und spätantiker Geist, Erster Teil Die mythologische Gnosis*. Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen, 1988 [GSG]
- *Hans Jonas: Erkenntnis und Verantwortung*. Irigo Hermann (Hrsg.). Lamuv: Göttingen, 1991 [EV]
- *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen*. Insel Verlag: Frankfurt am Main, 1992 [PUMV]
- *Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophischen Biologie*. Suhrkamp: Frankfurt am Main, 1997 [PL]
- *The Gnostic Religion*. Beacon Press: Boston, 3rd, 2001 [GR] (秋山やよ子・入江良平訳『グノーシスの宗教 異邦の神の福音とキリスト教の端緒』、人文書院、一九八六年)
- *Erinnerungen*. Insel Verlag: Frankfurt am Main, 2003 [E]
- Jüdisches Museum Berlin, *Zwei Jahrtausende deutsch-jüdische Geschichte: die Geschichte der Ausstellung*. Dumont: Berlin, 2002 [JMB]
- Koelbl, Herlinda (Hrsg.), *Jüdische Portraits: Photographien und Interviews von Herlinda Koelbl*. S. Fischer: Frankfurt am Main, 1989
- 品川哲彦『「正義と境を接するもの 責任という原理とケアの倫理」 ナカニシヤ出版、二〇〇七年。
- 芝健介、『ホロコースト ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』、中央公論社、二〇〇八年。
- シヨールレム、ゲルショム、『ベルリンからエルサレムへ 青春の思い出』、岡部仁訳、法政大学出版局、一九九一年。
- 筒井賢治、『グノーシス 古代キリスト教の〈異端思想〉』、講談社、二〇〇四年。
- トラヴェルソ、エンツォ、『ユダヤ人とドイツ 「ユダヤ・ドイツの共生」 からアウシュヴィッツの記憶まで』、宇京頼三訳、法政大学出版局、一九九六年。
- 山田品(責任編集)、『世界の名著 トマス・アクィナス』、中央公論社、一九八〇年。